3,894P−1/2

推古15年(607)年頃 年頭頃 (主)3907P−2/2

(主)3904P 聖徳の使者607年正月(または2月)に派遣

7行 南眼完成後 隣からの使者書き

駄 薬師像(主)3614P−3/4

法隆寺の本尊「薬師如来像」完成

用明上皇の発願になる「薬師如来像」は、昨年(六〇六)四月八日の花祭りの日(誕生会の日)に大倭国(肥後国)の法隆寺金堂内へ運び込まれ、安置されたものの、未だ眼が描かれていなかったのだろう。

それから数ヶ月後、是年(推古十五年)西暦六〇七年の年頭頃であったろうか――薬師如来像の「開眼会」が厳かに催されたようである。

(主)3614P−3/4

636

(写真図版 薬師如来坐像 参照)

(トル)

ok 誤 確認した。

コクヨ ケ−20 20×20

法隆寺の本尊「薬師如来像」完成

是の年（推古十五年、西暦六〇七年）、非常に喜ばしいことがあった。用明上皇の発願になる「薬師如来像」の完成に引き続き――建設中であった法隆寺「の堂塔もその全容を現わして、落慶の式が催されたのだった。

現法隆寺金堂の薬師如来像光背銘は、この折のことを示しているのであろう。

前述のように、

「我（用明天皇）、大御病を太平ぎなんと欲し坐す。故、寺を造り、薬師の像を作り、仕へ奉らんとす。――――小治田の大宮に天の下しらしめし大王天皇（推古天皇）と東宮聖王（聖徳太子）は、大命を受け賜りて、歳は丁卯に次りし年（推古十五年、西暦六〇七年）に仕へ奉りき」

とされている。（第七十章「西の法隆寺」、東の「斑鳩寺」の項において既述）

是の年（推古十五年）の年明け早々ころに、「薬師如来像」の開眼会が行

「奈良の大仏」15ページ　周尺であったという。

1尺＝19.9cmという（22.5cmとは違う）

なわれ、眼が入れられたのだろうと察せられる。

参考迄に述べると、

「奈良の大仏は、巨大でいわゆる大六仏の十倍もあった。――――天平時代には普通唐尺が使われていたが、奈良の大仏の場合は少し小さめの周尺が用いられた。それでも巨大なため、金堂内へ搬入することが出来ない。そこで先ず大仏を作り、大仏を囲むように大仏殿を建てたのだった。

奈良の大仏の「開眼会」は、釈迦の誕生日である「四月八日」の翌日、四月九日に行なわれた。

とはいえ、実際に開眼会が行なわれたのは四月九日のことであった。なんらかの事情で（たとえば雨のため）、九日に延期されたのであろう」

という。（「奈良の大仏」香取忠彦、草思社十五、六七、七三頁参照）

・多分、誕生会（「東大寺大仏の「灌仏会」は、天平勝宝三年（七五一）四月八日にとり行なわれた。

582

(2)その大仏の「開眼会」（眼を描き入れ、仏の魂を迎え入れる儀式）は、翌年の天平勝宝四年（七五二）四月九日に挙行された。

という次第なのだろうと想察される。（第七十章「元興寺」建立）の項において（既述）

＊なお、奈良の大仏を造る際に用いられたという「周尺」については、第九十三章「大仏造立」の項において検討したい。

■大後国（肥後国）の■「弦隆寺」の境内には、用明上皇・大王天皇（推古天皇）・東宮聖王（聖徳太子）をはじめとする大宮人たちの晴れやかな姿があった。

■香の匂いが漂う金堂の内外には、色鮮やかな幅広の幕が張りめぐらされ、刺繍の幡（旗）や■五色の幡がひらめいて

たくさんのさまざまな花が咲き乱れていた。

「なんとお美しく慈悲深いお顔をしておいでなのでしょう」

「本当に、身も心も洗われるようだわ」

まるわ

薬師瑠璃光如来（薬師如来）は、すばらしい出来ばえだった。（図録図版636〈薬師如来坐像〉参照）

なお、先に引用したとおり、浜田耕作氏は、「推古三十一年癸未年に作られた釋迦三尊に『鞍首止利佛師造』と明記してあるのに比較して、彼是其の様式を殆ど同じうしているから、薬師三尊も同じく止利佛師の作であろうと考へられる。云々」

と述べている。（第七十章〈薬師如来像と釈迦三尊像の製作年代について〉の項において既述）

こうして、用明元年（五八六）の発願から二十一年、そして推古六年（五九八）四月十五日の勝鬘経講の時〈播磨国の水田三百余町を『法隆寺』へ寄進した時〉から九年もの長い年月を経て、ようやく、大倭国（九州）の『法隆寺』は完成したのだった。

推古十五年（六〇七）に

㊥3829字　四百八十四字に対し　3,897字　㊥3605字原文　芽生える元2175字

■もっともこの時、大倭国（九州）の「法隆寺」および本尊「薬師如来像」の行く末について、知る人は誰も居なかった。（遥かな）

■聖徳太子御自身の胸の内にさえも、未だ、「西の都を廃絶する」という思想は芽生えていなかったに違いない。

■それにしても、薬師如来像の宝珠形の頭光の裏に刻まれている銘文中に、「大王天皇」とあ

■ってることが注目される。（第七十章「西の法隆寺」、東の「斑鳩寺」の項において、原文掲載）

■恐らく、

「推古十五年（六〇七）当時、すでに「（大王）天皇」という称号が用いられていたのだろう」

と思われる。

■この物語では、

「推古天皇の十二年（六〇四）正月一日に

H11.9.24(土)
H28.11.7(月)
H30(2018)10.5(金)～10.6(4回)
H31(2019)4.3(水)～4.4(3回)
令和元(2019)9.13(金)～9.14(3回)
令和2(2020)4.30(木)～5.2(4回)

名 下-5/1 4/30

3,898字

(南)3852字-1/3 (南)3853字-2/2

従来(じゅうらい)の「大王」のみの呼称(こしょう)は廃止(はいし)され、「天皇」(もしくは「大王天皇」)(ごうてんのうおおきみ)という称号(しょうごう)が採用(さいよう)された(すいこ)と考えたい。(第七十三章〈推古十二年正月一日〉の項参照)

*

コクヨ ケ-20 20×20

隋煬帝の野望

■海西の大陸の方に目を転じてみよう。

■ただ一途に皇帝を憧れた隋煬帝は、今や何がなんでも「唯我独尊の帝王の威光」・権力を広く万民に誇示したいと思った。

■隋煬帝は、即位すると早速、大隋帝国を華やかに飾り、天下の独裁皇帝尊厳を弥増すに足る壮大な規模の土木工事を、次■■驚くべきから次へと■を自負するその物力、人力を投じて行なっていった。

■六〇四年七月に即位した隋煬帝は、十一月には洛陽への御幸を行なった。■隋煬帝は、「洛陽は、周漢以来の帝都で、黄河、伊水①洛水の三河をひかえた要衝であり、水陸から貢賦を通ずるところだ」と述べ、洛陽故城の西方に東京を建設する詔を出し、毎月二〇〇万人を使役しての大突貫工事をはじめた。

■年あけて六〇五年、即位最初にむかえた元

（みつぎものと賦税）

日には、大赦を行なうと「大業」と改元した。

• 東京築城工事の進捗状況はぐ目覚しかったぐ。そして三月には、諸州の大富商数万家を新東京に移し住まわせた。

（金持ちの商人）

• 同年三月、この洛陽の新城造営事業に引きつづいて着手された[illegible]のが、一一一遠い南の揚子江（帝が即位前に駐在した水の都江都（揚州））と、洛陽新城とを直結する大運河工事である（以下〈第461図〈隋代の略図〉参照〉）。

• 秋八月、洛陽から水路（皇帝となって最初の江都行幸がとり行なわれた。

• 天子の御座船である豪華な「竜舟」をはじめとする数千隻ものおよぶ大舟団が、二〇〇里（約八五キロ）の列をなして進んでいった。

• 付近の農村からかりだされた舟の曳き手が八万人、岸では騎兵が列をつくって竜舟に随従した。

（等が隊列）

• 江都に八ヶ月間滞在の後、皇帝は陸路をとって還っていった。東京落成の祝慶式をあげるためである。

（洛陽へと）

世界の歴史 323°～324° 唐とインド

前頁17行

唐とインド323° 3行　小林林 1里＝300歩　1歩＝6尺　(隋)1尺＝23.55cm　0.2355m×6尺×300歩×200里＝84,780m　唐とインド322°　322°　3,900°－1/3　城 呉 シャウ　新 呉 ニン　世界の歴史 323°～324°　唐とインド

用3900°－1/3 3行

行ない 前頁13行

ともに

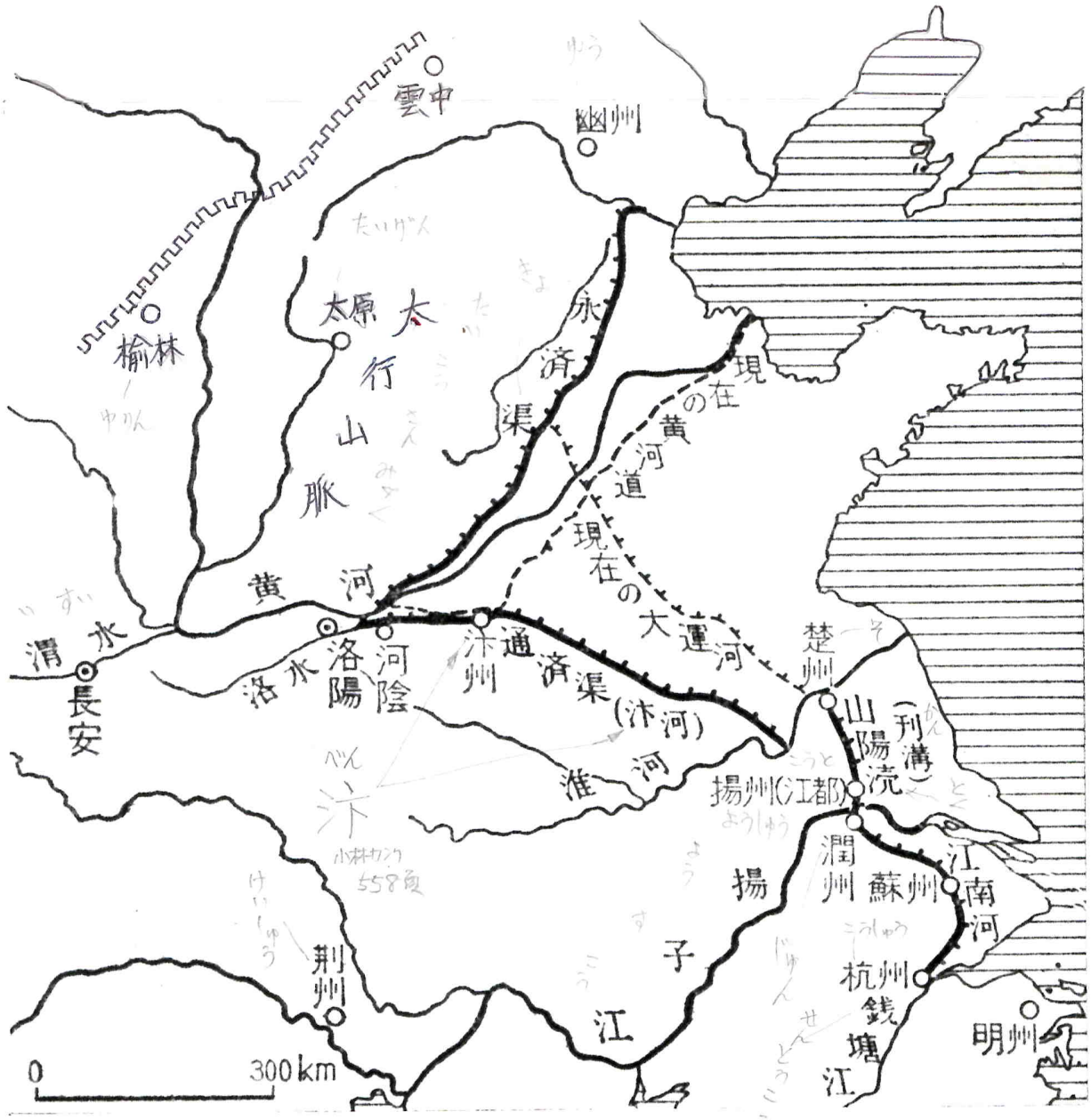
小林林 次頁1行

すすんで →2行

588

コクヨ ケ－20 20×20

・右頁上半分に、限度一杯はみ出させて、大きく掲載下さい。
・文字がかすれています。ゴチックで新たに入力して下さい。
・∩∩∩∩を、きれいに描いて下さい。



14QG 第461図 隋代の略図

13QG 世界の歴史(4)『唐とインド』塚本善隆、中央公論社、昭和43年5月10日発行、319頁

他参照

12日6 ・『永済渠』は、608年、隋煬帝によって開かれた運河である。
・『江南河』は、610年、隋煬帝が開通させた運河である。

次頁から

■大業二年（六〇六）四月、千乗万騎の儀仗も美しく東京（洛陽）へ帰還した帝は、宮城正門の上に出て大赦を発令し、かつ天下今年の租税を免ずると宣言した。

・だが、そして引きつづいて、陸の大工事と、北方への帝威誇示の巡幸が行なわれることになった。

（北へ伸びる）

・洛陽から太行山脈を越えて、晋陽（洛陽の北方三五〇キロの太原県）へ至る車道を開くために、河北諸郡から一〇万人の丁男が徴発された。

■大業三年（六〇七）正月、煬帝は、晋陽（太原県）からさらに足をのばして榆林（洛陽西北方四五〇キロの榆林県）まで行った。

・榆林の北方には、広大なモンゴル高原がはてしなく続いており、そこには「突厥」と呼ばれる大きな勢力をもつ国があった。

3,901字　陳舜臣中国の歴史 x6字　あしなし 阿史那氏 とっくつ 突厥　東洋史 6字 6字 538字

改行

前頁から

六世紀の中ごろ、トルコ種族の一氏族であ「阿史那氏」の勃興にともなって史上に現われ二世紀近くにわたり、蒙古・中央アジアに大権勢を維持していた柔然という。（「東洋史辞典」東京創元社、「突厥・阿史那氏」参照）

・隋煬帝が榆林へやってきた時、突厥の可汗（王）が三千余の部族をしたがえ、馬三千匹を貢物としてささげにきた。

・煬帝はいよいよ得意満面であった。（「世界の歴史」(4)唐とインド、中央公論社、三一八～三二四頁。「中国の歴史」陳舜臣、平凡社、四〇頁参照）

＊

たゆ突厥帝国は

コクヨ　ケ－20　20×20

H11.9.24(土) さんかいかん
(はば同緯度の) 山海関 東洋史辞281
榆林の東方(国)3903

大カンク 404 喜峰口 大カンク 627 山谷 長城ヨク

3,902

ぼうばく 茫漠 2022

土ビン 砂塵 広889

突厥の可汗(王)らが引きあげていった彼方へ

竜巻が砂塵をまきあげる長城線外の茫漠とした大地を望見していた煬帝は、即時、榆林から東へと続く大長城築造の詔をくだした。(「世界の歴史」(4)唐とインド、中央公論社、三二四頁参照)

なお、春秋戦国時代に長城が築かれ始め、隋の時に、大体現在の長城線が出来上がったと考えられている。

とはいえ、もっとも、その規模が完成したのは、明代十五・六世紀のことであった。

万里の長城とも称されるこの長城は、東は山海関(河北省東北、渤海沿岸)から西は嘉峪関までで実に延長二四〇〇キロにもなり、人類史上最大の建造物とさえいわれる。(「東洋史辞典」東京創元新社 長城 参照)

そして、万里の長城の最東端に位置することとなる山海関の東方には、高句麗があった。

高等地図 図25 「東方」次頁 遠かな東域

均等

「遊牧」この頁末行

592

コクヨ ケ-20 20×20

■それではこれ以後、また、筆のおもむくまに書き進めてゆこう。

■隋煬帝は、東方、高句麗の方角をじっと見つめ続けていた。その目には、憎しみの炎が燃え盛っていた。

■九年前（五九八）、高句麗王は、靺鞨の軍一万余騎を率いて遼西へ侵入してきた。

■そこで先帝は、高句麗への遠征軍を派遣した。

■しかし、あの時は、陸海三〇万の大軍を進めたにもかかわらず、陸軍は疫病と軍糧輸送難とで、また海軍は大風にあって、それぞれ軍の大半を失い、なすところなく引きあげてきたのだった。惨めな負戦であった。

■「だが、朕は、隋の天子となったからには、どうあっても高句麗に一矢むくいて、あの汚名の見返しをしたい。宿敵高句麗を討伐せずに、どうして隋の面目を保ち得ようか」

■その時、誰かがこう言った。

「七年前の開皇二十年（六〇〇）、東海海中に倭在する倭国が、使を遣わして闕（宮城）に詣り朝貢の礼をとりました。我が大隋帝国の属国となった倭国、および同じく我が国の従属国である百済。

新羅に、高句麗の背後を攻めさせたらいかがでしょうか。

■「うむ。それは良い考えだぞ。高麗の後方に位置している倭国・百済・新羅に厳命を下し、大至急朝貢させるがよい。

有無を云わさず朝貢させ、隋国の傘下にあることをこれら諸国に充分認識させた後、高句麗への出兵を余儀無くさせることに

■「ようし」

■こうして、隋煬帝の命を帯びた使者達は、高句麗の南に割拠する東夷の国々へと、急いで散っていった。

■それは、大業三年（六〇七）正月のことであったろうか。

考えてみたい。

■その後、隋煬帝は、もう少し北の方の様子を見てみたい、と思ったのであろう。

■同年（六〇七）八月、煬帝は雲中地方（北京の西北約二百キロ）へ赴き、啓民可汗の廬帳（遊牧民の移動テントの包）を訪ねた。

■ところが何と、丁度そこに高句麗からの使節が居合わせ、煬帝と顔をあわせることになった。

■侍従の黄門侍郎裴矩は、煬帝をそそのかして、こう言った。

「高句麗が今いるところは、もともと箕子の国でした。またそこは、漢から晋にかけて中国の植民地だったところです。つまり、現在は、異民族によって占領されている状態なのです。

先帝（文帝）の時に遠征して失敗したとはいえ、今こそ、これを取り返さなければなりません。

今日、高句麗の使者が啓民のところへ来ているのは、――隋と啓民とが同盟を結び、高

句麗へ攻め込むのを恐れているからなのでしょう。丁度良い機会です。高句麗の使節を脅して、朝貢させましょう」

■煬帝は、これに従って高句麗の使節に、

「来年、涿郡（現在の北京市）へ行くから汝の王に早く貢献するよう伝えよ。入朝すれば啓民可汗と同じく優遇してやる。だが、そうしないなら、啓民可汗を伴って高句麗を討つぞ」

と言った。

■■はいえ、もしかしたら煬帝は、

（高句麗と突厥（啓民可汗）の連合軍が、隋の東方政策を混乱させることになりはしないか）

と警戒したのかも知れない。

■■■■もっとも高句麗はこの脅迫に屈せず、あえて隋に朝献しなかったという。

（「中国の歴史」（四）陳舜臣、平凡社、四〇頁、五六頁の図（雲中）。「古代朝鮮」井上秀雄日本放送出版協会、一八六頁参照）

米

早くも是の年、大業三年（六〇七）に、百済の使節が隋へやってきた。

その百済の使者は、――――あるいは、隋から強要されたからであろうか、それともその昔の其

「せひ、高句麗へ出兵してほしい」

と懇願した。

この申出は、隋煬帝の歓迎するところであった。

百済からの高句麗出兵要請は、煬帝の高句麗討伐に名目を与えてくれたことになる

と解されたのだった。

また、予め述べると――新羅も翌年の真平王三〇年（六〇八）

「隋の高句麗出兵に合流して、高句麗を攻めたい」

と願い出た。（「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、一八五～一八七頁参照）

「三国史記」「新羅本紀」「真平王三〇年条」

子国（朝鮮半島北部域）を密かに窺うのの奪回

大業三年（六〇七）当初ころ

一方、隋煬帝が遣わした急使は、筑紫国着いた後――丁重に案内されて「日本国」の都、つまり九州タクマが原の「小墾田宮」へやってきたのではなかろうか。

それは、ある人は推古十五年（六〇七）年頭頃に行なわれた法隆寺本尊「薬師如来像」の開眼式直後のことであったかも知れない。

その時「都（小墾田宮）」には――「薬師如来像開眼会」に御臨席された後まだ滞在しておられる聖徳太子の姿もあったのではなかろうか。

用明上皇の発願になる「薬師如来像」の開眼会が、おごそかに、晴れやかに、とり行なわれていった。

さて、隋の使者から、

「今年中に、再度、隋国へ参られよ」

という勧誘を受けた日本国では、その客人の一種言い難い異様な気配に――こう危惧しないわけにはいかなかった。

「隋からの要請、無下には出来まい。しかし、使者の惚けた様子、隋帝（煬帝）に何やら思う所があるやに思われる。用心してほどほどの付き合いがよかろう」

■トピック■ ここに、聖徳太子の内意を含んで、大礼小野臣妹子らが、隋の都へと旅立った。

■推古紀十五年（六〇七）七月三日条に、

「大禮小野臣妹子を大唐（事実は隋）に遣す。鞍作福利を以て通事（通訳）とす」

と記されている。

● なお、『古事記』『孝昭天皇』段に、

「小野臣・柿本臣等十六氏族は、孝昭天皇の長子天押帯日子命の後裔である」

ということが述べられている。

● そして、天武紀十三年（六八四）条をみると、これらの氏族の多くが、『朝臣』という高い姓を賜わっている。（『古事記』『新潮社』一二六頁、注六参照）

● 『日本書紀』の記述によると、孝昭天皇は前四七五年から前三九三年まで天皇位にあっ

H30(2018)10.6(土)～10.8(4回)

3,909字

たといい、到底信じられない。

●しかし実は、第一表に示す通り、

孝昭天皇は、欽明天皇と同時代の日辺日本国B（近畿）の大王だったのであろう

と思われる。

●たぶん、

推古天皇・聖徳太子と、小野臣・柿本臣等とは、――――かなり濃い血縁関係にあったのだろう

と察せられる。

＊

■大倭国（九州）と、日辺日本国（近畿）とを統合した新国家の日本国Bの使者として遣わされた小野妹子らは、――九州の小墾田宮から、筑紫国の北岸へ至り、玄海灘を漕ぎ渡っていった、と考えてみたい。

＊

北岸 ㊐390ページ-2/2 2行

漕ぎ進んだ ㊐393ページ-11行

600

コクヨ ケ-20 20×20

聖徳太子の外交姿勢

日本国

■ 先ではここに、聖徳太子の外交姿勢（主として隋に対する外交姿勢）について、まえもって見ておくことにしよう。

■ 先にも述べたが、『旧唐書倭国日本伝』にこう記されている。

「日本國は倭國の別種なり。其の國日邊に在るを以って、故に日本を以って名と為す。或は曰う、倭國自ら其の名の雅ならざるを悪みて改めて日本と為すと。或は云う、日本は舊小國、倭國の地を併せたりと。云々」

■ また、『新唐書日本伝』には、こう述べられている。

「後稍く夏音を習い、倭の名を悪み、更めて日本と號す。使者自ら言う、國日の出ずる所に近しと。以に名と為すと。或は云う、日本は乃ち小國、倭の并す所と為る、故に其の號を冒せりと」

朝鮮の日本府がちいのか、新しいのか不明 ㊥3914p

㊥3604p　紀下540p　紀下540p注9　3,911p

「天皇」の称は推古、天武、持統説がある ㊥3831p-1/2

「天皇」源末展開　「ところが」この頁左端

とある。

■恐らく

(1) 昔――――「倭国」(九州地方)の東方の日出ずる所に近い「日辺」日本国」(中国・近畿地方)は小国であり、「倭国」の別種であった。

(2) とはいえその後、――「倭国」(九州)の「倭」という字は優雅さに欠けるので、其の名を悪み、改めて、「倭国」と「日辺」日本国」とを併せ、この新国家を「日本国」と號した、という推移を述べているのだろうと思われる。(「荒筋」第二編「他において既述」)

■通常、「日本」という国号は大化以後に定められたのであろうと考えられている。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、五四〇頁補注十六―九参照)

■しかしながら、この物語においては、次のような経緯を想定してみたい。

辺「日本国」および朝鮮半島の「日本府」等、かなり古くはじまった。

① ↑↑↑↑↑推古十二年(六〇四)正月一日、等与刀弥々大王(聖徳太子)は、――「倭国」

㊥146p-1/5 ナ字

コクヨ ケ-20 20×20

という名の雅ならざるを悪み、大国である「倭国」（九州）と、小国である「（日辺）日本国」（近畿）とを統合し、この統一国家を更めて「日本国」と號された。

② 中国へやってきた日本国からの使者は、自ら

「我が国「日本国」は、中国よりも日の出ずる所に近い。だから国名を為したのです」

と言った。

③ 日本国から遣わされてきた使者は、さらに詳しく、但しより丁寧に、

「そもそも日本国は、倭国の別種でした。其の国は、日辺に在るをもって、故に日本を以って名と為したのです。乃ち日本国は、舊小国でした。けれどもその後、倭国（九州地方）の幷す所と為り――

その際改めて、中国より

「日本国の出ずる所に近いので、故に其の號を冒したのであります」

とも言った。

のであろう。

■ 広く知られている通り、「倭」には、「みにくい」という意味合いがある。

■ 誰だろうと、自国のことを「みにくい国」とは呼びたくない。

■ とはいえ、その意味を承知のうえで、あえて「大伯の後」と自称する者達は、自分の国のことを

H5.3.21(日)(土) 中華 元1437P 中華 血脈小計86P 仏法の宇宙

3.913P

前1100年 ±600年 1700年

交義 石97P 交味 顔 僅か 元2376P 辛いて 元476P 与る(あずかる) 元37P 参照

『倭国』と[redacted]ように思われる。

・中国社会の一員として生き延びてゆく為に、周の王室を立て、自国を卑下して、辛うして僅かばかりの恩恵に与るしかなかったのであろう。

・つまり、『倭国』という名は雅ならざるとはいえ、それなりの重要なもって用いられてきた、と解される。

[redacted]しかるに、これまでの千七百年もの長い年月の間、先祖代々、子子孫孫『己の国』の称号と

自称 顔21行

呼び慣わしていた

交義 顔 交味

役割り(思惑)を

由緒ある

されてきた『倭国』という国名を、――一体、誰が改称し得たであろうか。

[redacted]『倭国』という国号を、大英断によって刷新[redacted]出来た人、それは聖徳太子以外の何人でもあるまい、と想到される。

[redacted]聖徳太子は、あるいはこう考えられたのではなかろうか。

「中華とは自分の国こそが世界の中央に位置する文化国家である」という意識をもって呼んだ称である。

だが、血脈から言えば、太伯の後である我

コクヨ ケ-20 20×20

3914ページ-2/2
H5.3.22(月)(6)
にほんこくけんぽう
日本国憲法
こと

隋書倭国伝 9ページ
「日出ずる處の天子…海西の…」
隔てる 元1993ページ
3,914ページ

「付き合う」元1477ページ 元1597ページ
「まして」いうまでもなく 分流
下 元2193ページ
ひくつ 1858ページ
成り上がる 元1675ページ

等こそ、周室の正統な血を受けている嫡流なのだ。

数年の間に俄に成り上がった者とは、較ぶべくもないこと明白。まして、我が国は中国の庇護の下にあるわけでもない。

卑下すべき理由が、どこにあろうか。

自ら卑屈にも中華の国に追随するのでなく、独立独行の道を選んで中国と対等に付き合いたいものよ」

こうしてここに、聖徳太子は、「日辺日本国」(近畿)と「大倭国」(九州)とを合わせた新たな国家にふさわしい国號を模索されたのだろうか。

「海西の中華の国の東に位置する隔てある国に対する東海の日出ずる處の国なれば以って我が国を『日本国』と名づけるがよかろう」

この聖徳太子の決断によって『倭国』という対外的な国号が廃され「日辺日本国」(近畿)と「大倭国」(九州)とを合わせた新国家は『日本国』と號されることになったと推察される。(既述)

以って 3910ページ 11行

605

ケ-20 20×20

3,915字

興す 云294字

隋書倭国伝 71字1行

拝謁 云1759字

携える 云1372字

この年の内に考えよ 390字

日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す

推古十五年（六〇七）七月三日に日本国から中国へ遣わされた小野妹子は、やがて隋の都長安に着いた。小野妹子はその年のうちに早くも朝廷へ参内し、天子隋煬帝に拝謁したという。

隋書倭国伝には、その時の様子が、こうしるされている。

「大業三年（六〇七）、其の王多利思比孤（隋の人々は、「東海海中の王」はこの当時も多利思比孤であると理解していたのだろう。しかし、実はすでに退位して皇太子の位にある聖徳太子）、使を遣わして朝貢す。使者（小野妹子）曰く、「聞く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拝せしめ、兼ねて、沙門数十人（僧侶）、隋国に来りて仏法を学ぶ」と」

来聘 元2227 隋書後74 雰囲気 元1976 挙措 元585 たちいふるまい 3,916 八貌 元1917 (八稔紙) 拝謁 元1759 目上の人に面会すること 落ち着き払う 元306 清楚 元1225 凛然 小林128 きりっとした さま、りりしい さま 元2333 きよらかで さっぱりした さま

とある。

米

■ さすが、□孝昭天皇□の血筋を引く誉れ高い出自なだけあって、――小野妹子の起居振舞は、優美で滞りなく、しかも凛然とした雰囲気を漂わせていた。

■ そして、小野妹子の挙措は、まさしく中国の礼儀作法にかなっていた。

■ しかも、隋煬帝のことを麗しくも□菩薩天子□と称える荘重な響きをもつ挨拶の文言は、中華の国の貴人達の心を魅了したものと思われる。

■ とはいえ、小野妹子が恭しく差し出した国書を見た時、隋煬帝の眼光が突然険しくなった。

■ その国書には、こう記されていた。

「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや、云々」

■ 隋煬帝は、これを見て悦ばず、鴻臚卿（四夷に関する事務、朝貢来聘のことをつかさどる官。今の外相のごときもの）を、そっと物

陰に呼びつけると、ーーーーあたかも、鴻臚卿の落度でもあるかのように、こう言って叱責した。

「蛮夷の書とはいえ、これほど無礼な者があろうか。朕のことを「日没する處の天子」だなどと書き送ってきたぞ。これというのもお前の策處によるものであったな。もう二度と上聞（天子の耳に入れること）などするな」

なお隋書倭国伝にはこう記されている。

「帝、之を覧て悦ばず、鴻臚卿に謂って曰く、「蛮夷の書、無礼なる者有り、復た以て聞する勿れ」と」

隋煬帝の心の内の怒りはいかばかりであったろうか。

《我こそ、全世界の中央に位置する中華の国の頂点に立つ天子である》

と自負しているところへ、東夷の国の王からこのような国書を突きつけられたのである。

「倭国は、この大隋帝国と対等な国交を開きたいと望んでいるのだろうか。」

「倭王は、夷蛮の国々のなかの一国王でしか

所詮→到底 3922-1/5 3行

3,918字

小林16字 ふんぬ 上天子 怨怒 元1981字 上隋倭国伝 クダイ いきどおり怒ること

まゲン 元 越縛 523字

ないというのに、何とも不孫な、口はったいことを言うものよ。身のほどをわきまえぬのもはなはだしい」

■鴻臚卿は、皇帝の怨怒の前にあって青ざめながらも、ようの思いでこう言った。

「上の無念な胸中の思い、察するにあまりあります。

しかしながら、東海の遥か彼方の倭国の王が、自らその国書を認めたなどとは到底考えられません。でございます。倭王が、礼儀を知らぬ何人かに、代筆させたのでございましょう。国書の一字一句を論ってみても、所詮、しかたがないことと存じます」

■そして、鴻臚卿はさらにこう読けた。

「そのような蛮夷の書の文字を云々するよりも他に、なすべきことがございます。今、現に、倭国が礼をつくして朝貢にまいっているのでございます」

■「うむ。そうであった。皆まで申すな」

■隋煬帝は、海西の菩薩天子とまで崇め、称

隋書倭 74字 ㊥3915字 17行

3,919P

嘆ーて、遠きを渉り道路勤労してやってきた者達の前に再び現われると、こう尋ねた。

「して、倭国の王はいかがお過しかな」

「はい、我が国の天子についてお気遣い下さいまして、大変有り難く心底より感謝申し上げます。しかし、是非とも御承知おき願いたいことがございます。

我が国はすでに、「倭国」という国名を廃し「日本国」という国号に改めております。

したがって、我が国に「倭王」はおりません。

どうか「倭王」でなく「天皇」と呼んでいただきたく存じます」

＊

なるほど、日本書紀にも中国の史書にも、それと明確に記されているわけではないが、恐らく、隋煬帝に、小野妹子は

(1) 大国「倭国」と小国「日本国」とを併せ、この統合した新国家を「日本国」と総称していること

(2) 「天皇」へと称号を変更したこと

「倭王」から

等々について

「告げた」であろうと推察される。

■参考迄に述べると、旧唐書倭国日本伝に、「其の人（日本国の人）、入朝する者、多く自ら矜大（ほこる）、実を以って對えず。故に中国焉小を疑う」とあり、新唐書日本伝に、「使者情を以ってせず、故に焉小を疑う。」とある。

■隋煬帝や、並み居る朝臣達の前にあって、雅やかな物腰ながらも毅然とした態度で、気品ある

〈自国を日本国と、ならびに天子を天皇と〉のことを滔々と語る小野妹子の様子は、中国人の目に、随分奇異に見えたのかも知れない。

■しかも、「どこまでが本当なのだろうか。大きい力を持つ〈倭国〉が、小国〈日本国〉を併合して、この統合した全国土を倭国と呼ぶのであれば理解できる。――しかし〈倭国〉の名を捨てて、何故〈日本国〉という小国の国名を採択したのか、納得し難い」

H5.3.27(土)(日)
H8.12.29(日)
H11.8(火)

採択 元860P

日本はすと小国 (日)3910P

相当 甚だ類10行

随分 3920P

天つ土地

旧唐書35末～36 2行

(日)3922-1/3 廿末

旧唐書35 えんだい 東大 次頁13行

かも知れない (日)3922-5/6 13行

611

コクヨ ケ-20 20×20

と疑ったことであろう。

■ それも また、何と

「倭王多利思比孤が王の位を退いて皇太子となり、女性が「天皇」になった、などとは全く訳のわからない話だ。七年前（六〇〇）の倭国からの使者と同じく、この使者も少々おかしいのではあるまいか」

と、いよいよ疑いを深めたように思われる。

■ さらに、

「「天皇」とは、甚だしくも思い上がった称号をつけたものだ。中国の「皇帝」の向うを張っての改号であろうが、「天空や北方に居るわけでもない」東海海中の夷蛮の国の王にすぎないというのに、あまりにも不相応で尊大極まりない」

と、あきれた■ であろう。

■ 「日本国」や「倭国」からの使者が、事実を語っているのか、気がふれているのだか、頭の中がこんがらかって、何とも要領を得ないが、一一どうだろうとも、中華の国の人々にとっては、異様に思えることばかりだったろうと想像される。

しかし、隋の高祖が言ったように、

「此れ大いに義理無し」

と言ってみたところで、到底どうなるというようなものでもなかった。

ここのところは、中華の国の寛容なところを見せる為

東海の島に帰国する蘇因高（＝小野妹子）に付けて、遍臚寺の掌客（外国使臣の接待を掌る官庁の役人）である文林郎裴世清らを「倭国」へ遣わすこととなった。

なお、隋煬帝は、蘇因高（＝小野妹子）の異常に秀り高く言」を疑い、これを無視――「天皇」宛でなく、「倭王」宛の国書をしたためたように思われる。（追って詳述したい）

＊

裴世清らは、東方のかなたの海中洲島の上に絶在するという倭の地を訪ねるための旅仕度に、気ぜわしい日々を送っていた。

ではここに、遍臚寺の掌客、文林郎裴世清の役職について、見ておくことにしよう。（以下、「聖徳太子」坂本太郎、吉川弘文館、一二三～一一五頁参照）

こと

3,922P－2/4

将 大カンワ 632P 漢ちゃウ　仕 大カンワ 82P 漢シ　郎 大カンワ 2258P 呉漢 字「つう」でない(毛)　聖徳太子 坂本太郎 114P

トル

・これによると、鴻臚寺掌客と文林郎とは、別箇の職掌をもつ別々の官となるが、唐制での文林郎は文散官の名であり、従九品上相当であった。

・『通典』巻三十四職官（職と官）の部の文散官の項によると、文林郎・将仕郎については、

「隋、散官（位階）だけあって官職についていない者）におく。大唐、これに由る」

と述べ、文林郎を散官としている。

・つまり、『通典』によれば、文林郎は散官であり、鴻臚寺掌客の官と両立できることになる。

・したがって、人面書の記載は、共に、裴世清の身分の一面を示している。

と解される。

■ところで、

〈推古紀十一年（六〇三）十二月五日条によれば、小野妹子が冠位十二階の第五階大礼

トル

コクヨ　ケ－20　20×20

名前を探したが、他に見当らない
令和03(2021)2.20(土)
柿本人麿の謎　梁山泊

であるのに比し、「――――何と、九品相当程度の低い位階の裴世清が、先方（日本国）への国使とされた」のだった。

■そこで、「隋は、対等国間の国交とはみなしていないどころか、日本の尊大な態度に対する不満を表明した人選である」と栗原氏は言う。（「上代日本対外関係の研究」「聖徳太子」坂本太郎、吉川弘文館、昭和六十一年五月十日第三版発行、一一四頁参照）

■もっとも前述の通り、推古紀十一年（六〇三）十二月五日条に列記されている冠位十二階の順番と、隋書倭国伝に掲載されている推古朝当時の（12.5 QM）内官十二等の順位とは、異なっている。

①推古紀十一年条には、「大徳・小徳・大仁・小仁・大礼・小礼・大信・小信・大義・小義・大智・小智」

隋書後伝 電こうろ 大業3年 ㊐3915P 12行 ことば 3,922P— 4/4 ㊐3922P 4/ 1〜3行 段紅 ことば 大変 ㊐3919P 5行 隋分違う。 隋に似ているからヤメル OK

と記されている。

② ところが、隋書倭国伝では、

「大徳・小徳・大仁・小仁・大義・小義・大礼・小礼・大智・小智・大信・小信」

となっている。

■ つまり、

〈大礼小野妹子は、冠位十二階中の第五階であるにもかかわらず、――――隋書倭国伝によると、大礼は第七階に当り、ずいぶん冠位が低い〉

ことになる。

13.5cm ※第五階と第七階(下)端役人)とでは

大変な違いだ。

616

■ そこで、隋の朝廷は、大いなる不満を抱き、

〈小野妹子の冠位が大礼であると知った時〉

位階がより低い〈九品相当程度の〉裴世清を

倭国(日本国)へ遣わす。ことにしたのかも知れない。(「広倚苑」〈九品中正〉参照)

＊

■ 大業四年(六〇八)、隋煬帝は、鴻臚寺(中国で、漢・北斉以来、外国来賓の接待・朝貢などをつかさどった役所)の文林郎裴世清および下客十二人を、倭国(日本国)への使者として派遣した。

㊐3920P 13行 ことば

コクヨ ケ-20 20×20

すなわち、隋煬帝は、蘇因高（＝小野妹子）の「其の容気の高遠なるを怪しみ、裴世清らに十三人を遣わして因高（小野妹子）を送り、倭国に来りて国風を観しむ」ことにしたのだった。（「経籍後伝記」。「聖徳太子」坂本太郎、吉川弘文館、一二三頁参照。後述）

それは、年が改まって大業四年（六〇八）の早春のことであった。（※推古紀十六年四月条「小野妹子、大唐より至る」から推察）

隋煬帝の「朝命」（「隋書倭国伝」末尾参照）を帯びた裴世清らは、小野妹子を伴って、東海のかなたに偏在するという「蓬莱の島」を目指し、黄河の流れを下っていった。

「大興城（長安城）」はもはや見えず、東京（洛陽）あたりも過ぎ、やがて船は、渤海に浮んだ。

なお、「隋の頃には山東半島の北側に、黄河の河口があった」

H30(2018)10.7(日)～10.8(4回)
H31(2019)4.4(木)～4.4(3回)
令和元(2019)9.14(土)～9.14(3回)
令和2(2020)4.30(木)～5.2(4回)
令和3(2021)2.20(土)～2.23(4回)

タイトル 3899 3773

3907 1/2
3776 1/2
古代朝鮮 185～6

3,924

じゅりつ 樹立 しっかりと立てること

よみ 詔 2281

3900 2/3 隋代の略図

2/20 下～2/22
2/21

望 ＜の項において既述＞

をむすぶ百済国があった。

●百済国は、隋王朝の樹立の九年（五八一）に早＜隋へ朝貢の使者を送ってきた。

●また昨年（六〇七）、百済国は、隋に「高句麗へ出兵していただきたい」と要請したのだった。（第七十二章＜隋の文帝＞の項、第七十四章＜隋煬帝の野

とい う。（「世界大百科事典」平凡社、＜黄河＞参照）

右手には山東半島の山々が連らなっており、左手には高句麗があった。

高句麗の兵達にそれと悟られないようー隋の船は、山東半島の北岸沿いを、忍びやかに東の方へと進んで行き、そして山東半島の先端から一気に大海（黄海）の沖へと向った。

その大海原を渡りきると、そこには隋と詔

第461図＜隋代の略図＞

コクヨ ケ-20 20×20